

第138回

いくつ覚えていますか？
うっとり聴いたアイドルの台詞

BSフジで平日放送されている『クイズ！脳ベルSHOW』には、昭和のヒット曲を流しながら途中で音を消し、そのあとの歌詞を当てさせるというクイズがあります。今回はそれにあやかり、次に掲げる歌に挿入されていた「台詞」を甦らせていただこう、という趣向です。5曲思い出せれば立派なものです。

昭和48年、現役女子大生DJのあべ静江が第2弾シングル『みずいろの手紙』（詞・阿久悠）の冒頭で囁いた敬語入り台詞、今でも覚えていると、言ってくださいますか。

同じ昭和48年に出揃った「花の中3トリオ」は、デビュー間もない十代半ば、それぞれの個性が感じられる「語り」で、ファンの心を掴みます。森昌子は、昭和48年8月発売のシングル第5弾『白樺日記』（詞・阿久悠）で『からたち日記』を彷彿させるモノローグ（独白）で新境地を開き、桜田淳子は同年11月発売のシングル第4弾『花物語』（詞・阿久悠）で花を自らに擬人化し、翌年8

月発売の第7弾『花占い』（詞・阿久悠、原案・葦島若代）では肯定否定の一人占いに興じています。

名曲カルテ

昭和歌謡と
いままで



堀井六郎
絵・松本

山口百恵は、少し後の同50年3月、シングル第8弾『湖の決心』（詞・千家和也）で16歳とは思えない達観女性を見事に演じ、昭和55年11月、三浦友和との結婚式当日にリリースされたラストシングル『一恵』（詞・横須賀恵）山口百恵）では、引退する心境とファンへの感謝の思いを、自らの言葉で語っています。

男性アイドル新御三家のうち、西城秀樹は、昭和48年『ちぎれた愛』（詞・安井かずみ）、そして同51年『ジャガー』（詞・阿久悠）で、『愛の告白』をストレートに伝えていますが、特に『ジャガー』の長台詞は、自ら主演した映画『愛と誠』を思わせるような熱演でした。

近藤真彦は、同56年6月発売の第3弾シングル『ブルージーンズメモリー』（詞・松本隆）で、あの美樹克彦も叫んだ「バ○ヤ○」をマイクの音量レベルを越えんばかりに絶叫、16歳の若さを爆発させると、同年齢の薬師丸ひろ子は21歳になった昭和60年、『あなたを、もっと知りたくて』（詞・松本隆）で、N

TTのCMにふさわしい会話を再現してみせました。

時代は遡り、GSナンバーの中にも思い深いものがあります。ライブでは狂乱のパフォーマンスを見せるオックスですが、同43年発売の『スワンの涙』（詞・橋本淳）では、野口ヒデト（現・真木ひでと）が静かに呟きました。スパイダースは昭和42年発売の『いつまでもどこまでも』（詞・佐々木ひろと）で、なんとも甘ったるい口説き文句を挿入、『なんとなくなんとなんとなん』（詞・かまやつひろし）の二番煎じの台詞挿入でしたが、歌っていた井上順もさぞかし照れくさかったことでしょう。



昭和43年発売のヒデとロザンナの『愛の奇跡』では、愛の復活を願うイタリア語の叫びに聴き惚れ、昭和47年発売の南沙織『哀愁のページ』の流暢な英語も印象深いものでした。

平山三紀（現・みき）の『真夏の出来事』（詞・橋本淳）にも台詞が挿入されています。エンディングでフェイドアウトされる中、彼女は英語で別れの言葉を囁いていたのです。